

# 達成行動における他者志向的動機 概念の再検討

伊 藤 忠 弘

他者志向的動機は、「自分を支えてくれる家族や仲間のために」や「応援してくれる周りの人の期待に応えるために」という意識で自らの達成行動に従事する動機づけであり、「自分自身のため」という理由の下で達成行動に従事する自己志向的動機と対比される。自己決定理論では、自己決定あるいは内面化の程度に応じて、外発的動機づけから「外的調整」、「取り入的調整」、「同一化調整」、「統合的調整」と連続的に内発的動機づけへと移行するモデルを提起している。しかしこのモデルでは、他者志向的動機に基づく達成動機づけの位置づけが明らかではない。真島（1995）は、他者志向的動機とは、自己決定的でありながら、同時に人の願いや期待に応えることを自分に課して努力を続ける意欲の姿であると定義している。「他者の期待に応えるべく達成行動に従事することを自律的に行う」と記述することの妥当性についての疑問は、「自己決定」や「自律性」の定義の問題と関係している。本論文では、著者が他者志向的動機について行った研究をレビューした上で、他者志向的動機概念を再検討し、自己志向的動機と他者志向的動機の関係づけのモデルについての問題点を整理して、今後の研究の方向性を探ることを目指す。

## 研究知見のまとめ

### 達成場面における自己志向的動機と他者志向的動機存在

伊藤（2004a）の研究1では、大学生を対象に勉強やスポーツといった達成場面での努力の理由として語られる「自分のため」という理由と「両親のため」や「ファンのため」といった「他者のため」という理由についての意見を自由に記述するように求めた。そしてその内容をKJ法により、①「自分のため」に対する肯定的態度、②「他者のため」に対する肯定的態度、③「自分のため」と「他者のため」の相互補完、④究極の動機としての「自分のため」、⑤「自分のため」と「他者のため」の統合、という5つのカテゴリーに分類した。全176個の記述のなかで最も多かったのは、④究極の動機としての「自分のため」であり、45%を占めていた。このように多くの大学生は、「他者のため」と努力や達成の理由を語る場合でも、結局は「自分のため」にやっていると解釈できることを指摘していた。また「自分のため」に努力している、あるいは努力することが望ましいという記述は19%であり、達成場面での努力を自己志向的動機から解釈する記述が多いことが示されている。「自分のため」と「他者のため」を使い分けたり相互に補って用いることを記述した「相互補完」（19%）や「自分のため」と「他者のため」が矛盾なく統合されていることが望ましいとする「統合」（6%）のように両方の理由を取り上げて記述しているのは全体の25%で、「他者のため」に対する肯定的態度の記述は10%にとどまった。このように大学生は達成や努力を「自分のため」になされるものと考えており、「他者のため」という意識は比較的少ない。

伊藤（2007b）は大学生に対する面接調査のなかでこれまでの努力経験を振り返らせて、「自分のため」に努力してきたか、それとも「他者のため」に努力してきたか、あるいはその両方かを直接尋ねた。その結果、これまで「自分のため」に努力してきたと振り返った人は51%で最も多く、

両方と回答した人が27%で、「他者のため」と回答した人は22%と少なかった。同様の結果は伊藤（2008b）でも認められている。

### 他者との関係性に基づく動機多様性

伊藤（2006）は大学生に対する面接調査で、努力を動機づける源泉として他者や他者との関係性が強調される要因が多様であることを明らかにしている。これを再整理すると8つの要因に分けることができる。

1つ目として、自分を直接支えてくれる人からの「励まし」や「アドバイス」などが挙げられる。2つ目は自分に期待してくれる人の存在である。直接「励まし」や「アドバイス」を与えてもらっているわけではないが、自分を応援してくれる人の存在が間接的に「支え」になっている。3つ目は自分と一緒に努力している人の存在である。同じ部活動のなかで仲間が努力している姿を目の当たりにして自分も努力したり、受験勉強で親が自分と一緒に努力してくれたことが語られる。ただし受験勉強にせよ部活動にせよ、仲間の努力が自分の相対的な地位を脅かす可能性もあるためプレッシャーと感ずることを語る者もいた。4つ目は尊敬できたりやる気の高い先輩や先生の実存である。これは目標に向かって努力していくなかで、自分のモデルや理想像として働いている。5つ目は良好な友人関係の実存が挙げられる。直接的な支援ではないが、安心して努力できる環境を提供するものと考えられる。6つ目は自分を評価し褒めてくれる他者の実存であり、特に親が挙げられることが多い。このような評価者の実存はときにプレッシャーとして動機づけに否定的な影響を与えることもあるが、自分を動機づける要因として挙げた者は、他者から評価され褒められることに対する自分の欲求と実際に肯定的な評価を受けた経験を語っている。7つ目は自分の努力に影響を与えるというよりも、自らの努力を通して影響を与えたいと考える他者の実存である。親を安心させることや相手を喜ばせることが重要な動機づけとなっている場合であり、自分の努力が他者のためにもなっている、という意識の重要性も語られている。8つ目は競争相

手、ライバルとしての他者の存在である。

### 自己志向的動機と他者志向的動機の否定的側面

「自分のため」あるいは「他者のため」という理由はそれぞれ達成行動を動機づけると考えられるが、同時にその否定的側面が認知されている。

「他者のため」に努力することは、言い訳や逃げ道となり責任逃れをしやすくなることや、他者の反応に依存することによって他人の期待がなくなったときにやる気がなくなる恐れがあることが指摘されている。また「他者のため」に努力することは、失敗できないというプレッシャー、気負い、失敗したときの申し訳ないという気持ちを生むことが指摘されている（伊藤，2004a）。受験勉強や資格試験において親や教師からのプレッシャーを感じた経験や、部活動においてコーチや仲間からのプレッシャーを感じた経験を、多くの大学生が回顧的に報告している（伊藤，2006）。

一方で「自分のため」に努力することは、内発的に動機づけられた努力、あるいは自律的、自己決定的になされた努力としてこれまで肯定的に捉えられてきた。しかし、「自分のため」に努力している場合には達成できないときに目標や基準を低く変えてしまいやすいことや、「自分のため」だけに努力することは精神的にきつく、一度やる気が下がると抜け出しにくいことが指摘されている。

### 他者志向的動機の達成動機づけに対する影響

先にも述べたように「自分のため」に努力することは、自律的、自己決定的に動機づけられた状態であると考えられるため、達成課題に対して持続的にとりくみ、否定的な結果が生じた場合でも動機づけが低下することが少ないため、「他者のため」と考えて努力する場合よりも望ましいと考えられてきた。しかし他者志向的動機に対する肯定的な態度が適応的な達成行動と結びついている可能性も明らかにされている。伊藤（2004b）は高校生を対象に質問紙調査によって、他者志向的動機への態度と学習動機

の関連を調べた。その結果、他者志向的動機への肯定的態度は友人からの承認を得たいといった理由、他の人も勉強しているからといった同調的な理由、親を喜ばせたいといった親との関係に基づく理由と相関が認められただけでなく、適応的な学習動機と考えられる学習内容に基づく理由（例えば、「いろいろな知識を身につけたい」）とも正の相関が認められた。この相関の大きさは自己志向的動機への態度と同じ程度であった。

大学生を対象にした調査では、他者志向的動機への肯定的な態度が達成動機のなかの「挑戦・成功欲求」および「社会的貢献欲求」と正の相関を持つことが明らかにされている。この2つの欲求は自己志向的動機への態度とは相関が認められなかった（伊藤，2007a）。

このように質問紙調査においては、他者志向的動機への肯定的な態度を保持している者が学業に対する動機づけや一般的な達成動機づけが高いことが示され、他者志向的動機の肯定的な影響が示唆されている。

### 自己志向的動機と他者志向的動機の関係づけ

自己志向的動機と他者志向的動機は二律背反的に語られることがある。例えば「『自分のため』を第一にした方がいいと思う」とか「『誰かのために』という方ががんばりやすい」という自由記述に認められるように、いずれか一方をもう一方よりも自分の努力にとって重要であると考えている場合には、2つの動機を対立して捉えている。しかし自由記述の分析では、「自分のため」と「他者のため」を状況に応じて使い分けることが望ましいという記述、両方とも大切であるという記述、一方の動機だけでは動機づけが維持できないときにもう一方の動機で補完することが望ましいという記述、さらに「自分のためにも他者のためにもがんばる」という状態が矛盾なく生じるといった記述が含まれていた（伊藤，2004a；研究1）。

自由記述を元に作成した尺度の因子分析（伊藤，2004a；研究2）では、「自己志向的動機傾向」と「他者志向的動機傾向」は別々の因子を構成した。「他者志向的動機傾向」は、2つの動機を対立して捉えず双方を大切

とする「動機の統合」、および状況に応じて動機を使い分けるという「使い分け」と正の相関（0.32～0.42）が認められた。またこれらの下位尺度は「自己志向的動機傾向」とは弱い負の相関（-0.12～-0.20）が認められた。この結果は、必ずしも2つの動機が対立したものと捉えられておらず、他者志向的動機を意識する者では自己志向的動機の存在を認めつつ、両者を使い分けたり統合していることが伺われる。

大学生に人生で最も努力した経験について自分を動機づけた要因を尋ねると、努力する対象に対する自分自身の関心や興味の重要性とともに親や友人からの援助や応援の存在を同時に挙げるケースが少なからず認められた（伊藤，2006）。先にも述べたとおり、直接これまでの努力経験を振り返らせた場合、その動機を「自分のため」と「他者のため」の両方であると回答した人は27%であった（伊藤，2007b）。

このように自己志向的動機と他者志向的動機の関係づけ方は様々であり、いずれかを優先する人もいれば、両者を統合された状態で捉えている人もいることがわかる。

### 他者志向的動機とその否定的側面の認知の関係

「他者のため」の努力がプレッシャー、気負い、申し訳ないという感情を生じさせることが指摘されているが、このような他者志向的動機の否定的側面の認識は、「他者志向的動機への肯定的態度」、あるいは「自己志向的動機と他者志向的動機の統合」とほとんど相関が認められていない（伊藤，2004a；伊藤，2008a）。このことは、その否定的側面のために他者志向的動機を重視しない人がいる一方で、否定的側面を認知しながらも他者志向的動機を保持して努力している人がいることを示唆している。

このように他者志向的動機を保持しながらその否定的側面を同時に認識している人の存在は、下位尺度得点に基づいたクラスター分析によって回答者をグループ分けした研究でも明らかにされている。「互恵的他者志向的動機群」と名づけたグループは、「他者志向的動機」と「否定的側面の

認知」の得点が他の群と比較して高く、「自己志向的動機」は比較的低い。またこのグループは社会的貢献欲求が高く、相互協調的自己観を保持しており、親から「よい子」であることや「進学・学歴」を期待されていると認識している。

これに対して、「他者志向的動機」の得点が高く「否定的側面の認知」が低いグループは「自律的他者志向的動機群」として区別された。このグループは返報性の規範の認知が高いが、相互協調的自己観の得点は低く、「よい子」であることを期待されているという認識も少ないが、挑戦・成功欲求が高い。このように「他者志向的動機」が高い人でも、その否定的側面を意識しているか否かで、親からの期待認知、人間関係観、達成欲求が異なることが示唆される（伊藤，2007a）。

他者からの期待に伴うプレッシャーを感じながらも、その期待に応えようとして目標達成に動機づけられているような人は、ある種の葛藤状態にあると言えるかもしれない。ただし大学生にこれまでの努力経験を振り返ってもらった場合には、他者から期待されてプレッシャーを感じた経験がある者はそれほど多くなかった。学業についての親の期待を尋ねた伊藤（2004a）でも、「良い成績・良い大学」を期待されたと回答した人が31%（49名）を占める一方、「期待なし」（18%）、「放任・自由・自律」（13%）、「人並み」（10%）と期待を意識していない人も多い。また「良い成績・良い大学」を期待された人のなかでも反応は様々であり、「期待に応えたいと思った」と親の期待を肯定的に捉えて自分を動機づけたことを報告する者（12%）がいる一方で、「プレッシャーを感じた」、「すごく嫌だった」と否定的に報告する者（8%）や「自分のしたようにした」と親の期待を無視した者（8%）もいた。さらに肯定、否定の入り交じった感情の報告も認められた。このように期待の有無とその反応の仕方は個人差が大きいことが示唆されている。

## 2つの動機の現実と理想

伊藤（2008b）は大学生に対する面接調査により、これまでの努力を主に「自分のため」に行ってきたか、「周りの人のため」に行ってきたか、あるいはその両方かをまず質問し、回答に応じてその意味するところを質問するという手続きで現在の努力の動機を確認した。さらに将来の理想とする努力のあり方も同様の方法で尋ねた。回答は、①「自分のため」（例えば、自分を向上させるため、自己満足、好奇心、夢の実現、好きだから、など）、②「周りの人のため」（例えば、両親の期待に応えられるように、応援してくれた人のため、など）、③「自分のための努力が結果的に周りの人のためになる」、④「周りの人のための努力が結果的に自分のためになる」、⑤「両方」（例えば、対象による、場合による）、⑥「周りの人の自分に対する評価のため」、⑦「自分のための努力が周りの人のために、周りの人のために自分のために」という7つのカテゴリーで分類された。

現在の努力のあり方については、46%が「自分のため」を挙げており、自由記述の分類（伊藤，2004）や面接調査（伊藤，2007b）と一致している。「自分のため」と「周りの人のため」を関係づけた③、④、⑦を合わせると28%であり、「両方」は12%、「周りの人のため」は9%であった。一方、理想の努力のあり方としては、やはり「自分のため」が43%と最も多く、次いで「両方」が22%であった。現実から理想への変化を調べてみると、変化がなかったのは39%であり、過半数の回答者は現在の努力のあり方を変化させたいと考えていた。そのなかで最も多かったのは、「自分のため」から「両方」および「自分のための努力が結果的に周りのためになる」への変化であり、「自分のため」の目標達成を維持しながら同時に「周りの人のため」に努力したいという志向性を持つ人は17%であった。この際の「周りの人」としては「会社」、「親」、「将来の家族」が挙げられた。このような人は自己志向的動機から、自己志向的動機と他者志向的動機を統合する方向へ変化することを目指している。逆に、「自分のため」と「周りの人のため」を関連づけた理由（③と④）や、「周りの



人のため」(②) から「自分のため」へ変化することを目指している人も同じく 17% であった。

この結果は、自己志向的動機から他者志向的動機への移行と、他者志向的動機から自己志向的動機への移行の双方が起こりうることを示唆しており、最終的に「自分のため」に達成行動を行う方向へと一方向に移行することを仮定する自己決定理論の観点だけでは、移行過程の全体像が捉えられないと考えられる。

## 他者志向的動機研究の概念とモデルの検討

### 他者志向的動機の範囲と定義

「他者志向的動機」として扱ってきた動機づけの内容については、さらに詳細に吟味して定義を明確にする必要がある。他者との関係に基づく動機として整理した 8 つの要因は相互に関連していて、同じ人との関係が複数の意味で達成を動機づけることも考えられる。例えば自分の所属する部活動の仲間はライバルであると同時に、同じ目標を共有しながら共に努力している存在にもなるし、直接アドバイスや励ましをくれたり、自分に期待を寄せてくれる存在ともなる。このような励ましや期待によって、自分の努力と達成を通して相手を喜ばせたいとか期待に応えたいといった、相手に対する配慮を伴う動機づけが生まれると考えられる。

「他者のため」と捉えられる達成動機づけは広く上記のような他者との関係に基づくが、他者志向的動機を限定的に定義するならば「期待に応えたい」や「応援してくれる人に恩返しをしたい」という意識を重視して、①（支え、励まし）、③（期待）、⑦（配慮感情）を中心に定義することができるであろう。自分の遂行の比較相手としてのライバル（⑧）や、自分の遂行の評価者としての他者（⑥）が動機づけに果たす役割とは区別することができる。②（努力の共有）と④（モデル）の他者は、直接的な相互交渉がなくても成立する。極端な場合には、プロスポーツ選手のように相

手を直接知らないこともあるだろう。その意味で他者志向的動機とは分けて考えられる。⑤（友人関係）は努力をする際の環境の良さと関連をしており、より背景的な要因として区別することができる。

### 他者志向的動機の「他者」

他者志向的動機への態度を測定する尺度では、「他人のため」、「人のため」、「みんなのため」、「誰かのため」という表現が用いられ、また特定の他者としては「親」、「家族」、「ファン」という対象が採用されている（伊藤，2004a）。質問紙に回答させる際の説明のなかでは、「他人のため」の「他人」として「応援してくれるファン」や「支えてくれる家族」を例として挙げて、「自分のため」と対比させている。しかし不特定多数の「ファン」と自分の家族では努力を動機づける対象としての意味や影響が異なるかもしれない。

大学生に対する面接調査で、これまでの人生で最も努力した経験のなかで「自分にとっての重要な役割を果たした他者」を尋ねたところ、多くの場合、親、教師やコーチ、監督といった達成行動を直接支える人や、悩みを聞いてくれたり励ましてくれる親しい友人やチームメイト、クラスメイトが挙げられた。北京オリンピックの報道では、メダリストと親、兄弟、子ども、配偶者、コーチとの関係がクローズアップされ、さまざまなエピソードが紹介されることが多かった。一方で、スポーツ選手は「ファンのため」とか「応援してくれる方のため」といった表現を使って話すことも多い。北京オリンピックのメダリストのインタビューでも「応援してくれた方々皆さんに感謝したい」といった不特定多数に向けられたコメントが多く認められた。オリンピック選手やプロスポーツ選手のように、不特定多数が自分を動機づける重要な他者となることは、大学生ではかなり稀かもしれない。しかし部活動のなかで、同じ学校に所属する不特定の人から応援されることもあるだろう。

また複数の「他者」が常に同じ影響を持っているとは限らない。例えば、

親には反対されている部活動をチームメイトの応援を受けながら努力するという場合には、親とチームメイトでは動機づけに果たす役割が異なっている。質問紙における尺度項目では、「他者のため」という曖昧な表現と共に具体的な表現（例えば「両親や先生」など）も用いられているため、検討の余地があると考えられる。

## 2つの動機の「統合」のあり方の多様性

伊藤（2008b）では、自己志向的動機と他者志向的動機の2つを調整するやり方として、どちらかを重視し優先するのではなく、両者を統合するような変化が志向されていることが明らかにされた。その1つ目は「自分のために努力して、そのことが周りの人のためにもなる」ような状況であり、例えば自分の好きなことを職業として「自分のため」に働き、その成果を相手が評価してくれて喜んでくれるといった状況である。もう1つは、「周りの人のために努力して、それが結果として自分のためにもなる」ような状況であり、例えば親が望む学校に進学して喜ばせること自体を自分の目標として努力するような状況である。両者は「自分のため」に努力することと「周りの人のため」に努力することが接近しているという点でどちらも「統合」されていると考えられるが、区別することもできる。

達成行動が複数の動機によって動機づけられている方が、困難に直面した場合でも動機づけを維持するのに有効であるかもしれない。実際のところ、「自分のため」だけや「周りの人のため」だけに努力している人は少ないであろう。2つの動機を統合することによって、一方で動機づけが上がらないときにもう一方で補完することが可能となるかもしれない。また2つの動機を状況や課題によって使い分けることも指摘されている。しかし実際にどのようにしてそのようなことが可能となるのだろうか。2つの動機を調整した結果として両者を「統合」する場合に、具体的にどのようにしているのか、その状態と「統合」への過程についてさらに詳細に検討する必要がある。

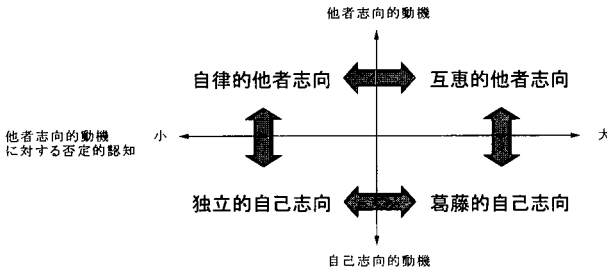


図 2つの動機の関係づけのあり方と移行モデル

### 2つの動機づけの関係づけのあり方とその移行モデル

伊藤（2007a）では、自己志向的動機と他者志向的動機への態度を、「自己志向的動機の重視」、「他者の期待に応えることの自己目的化」、「他者志向的動機の否定的側面」という3つの次元で捉え、クラスター分析により4つの回答者の群を構成した。4群の3つの次元の特徴から、他者志向的動機と自己志向的動機のどちらを重視するかと、他者志向的動機の否定的側面を意識しているか否かによって整理するモデルを提案した（図）。達成行動に他者との関係性が絡んでくる場合、達成行動は「自分のため」だけでなく「他者のため」に行うものともなりうるが、それは同時に他者の期待がプレッシャーとして自分の遂行に否定的に働く可能性をもたらすことにもなる。プレッシャーを感じながらも「他者のため」に努力し続けることもできるであろうが、時には「他者のため」に努力することをやめて「自分のため」だけに努力するようになるかもしれない。あるいは他者の期待を操作したりすることにより、他者の期待に伴う否定的な認知自体を意識しなくなるかもしれない。

このようにその時々状況や他者との関係性に依じて、2つの動機の関係のあり方が変化していくことを仮定しているが、具体的にどのような状況で、あるいはどのような他者との関係性が2つの関係づけのあり方を変えるのかについては明らかではない。しかし自己志向的動機と他者志向的

動機への態度はそれまでの努力経験に基づいて形成されると予想されるので、それを大きく変化させるには達成場面に関連するかなりインパクトのある出来事や「葛藤」を経験する必要があるかもしれない (伊藤, 2007 a)。

スポーツ選手のインタビューの内容のなかにその事例を見いだすことができる。北京オリンピックソフトボールでの金メダル獲得に貢献した上野由岐子選手は、高校時代に腰を骨折して3ヶ月ほどのリハビリ生活を余儀なくされるにあたり、「試合の中で黙々とバッターに投げていた自分から、仲間の存在を感じながら試合をするようになった」。それまでは自分が抑えればとにかく勝ると考えていたが、「みんなのお陰で自分があるんだなってすごく感じました」と語っている (Sportiva 2008年9月25日号)。一方で、オリンピックのマラソンで2大会連続のメダルを獲得した有森裕子は、バルセロナ五輪の後に「プロ」を目指したが周囲からわがままと理解されず、チームから浮いてしまう。周囲が納得するような結果を出せば注目されると臨んだアトランタ五輪について、「自信はなかったし、正直いって自分にかけてプレッシャーはすごかった。結果を人にほめてもらいたい、と心底、思わなかったんですが、やはりここまでやってきた自分自身をほめたかった。」と語っている (芦田, 2003)。

この2つの事例がどの程度一般化できるかは不明であるが、なんらかの困難を経験した後で、自分の努力や達成行動の意味づけが「自分」と「周囲の他者」との間で揺れ動く可能性を示唆する。しかも状況によって「自分」から「他者」へ、あるいは「他者」から「自分」へといずれの方向へも動機の意味づけが移行しうることが示されている。

仮にそのような移行へのきっかけがあるとすれば、それは何であるのか。先の事例では、自分の達成に関連した困難への直面が背後にあった。その困難を克服し達成に向けて自分を動機づける過程で、達成行動に対する意味づけを変化させる必要があった。今後は2つの動機の関係づけのあり方を大きく変えることになったきっかけについての事例を収集することによ

って、「葛藤」の存在も含めて変化を促す要因を明らかにする必要がある。

### 2つの動機の関係づけの変化を促す「葛藤」とは

達成に向けて努力を動機づける主要な理由が自己志向的動機と他者志向的動機の間で移行したり、その関係性を変化させて調整や統合が生じるきっかけとして、2つの動機をめぐる「葛藤」の存在が仮定されている（伊藤，2007a）。この「葛藤」は、それまでの動機によって達成行動に対する努力を維持し続けることが困難であるような状況を想定したものである。このような「葛藤」が生じうる状況を考察してみると、少なくとも3つの異なる状況が想定される。

第一に、「他者のため」といった社会志向的動機により達成行動に従事する場合には他者からの期待が伴うことが多いが、その期待がときに行為者にとってプレッシャーと感じられることは前にも述べた。このプレッシャーが大きくなり、行為者が達成行動を継続するのに精神的に困難を感じざるを得ない状況に追いつめられた場合には、「自分のため」に努力をするように達成動機づけのあり方を変えていくことが予想される。クラスター分析に基づく「互惠的他者志向群」（伊藤，2007a）は他者志向的動機に好意的態度を保持しているのと同時に否定的な側面も認知しており、この「葛藤」状況にもっとも近いと考えられる。他者志向的動機の強い人が他者志向的動機の否定的側面を強く意識するようになる状況が「葛藤」を生じさせる可能性がある。

第二に、自己志向的動機あるいは他者志向的動機のどちらか一方では達成に向けて努力を継続することが難しいと感じられる状況が考えられる。自由記述による調査や質問紙調査では、「自分のため」もしくは「他人のため」のいずれかで動機づけが高まらないときに、もう一方を利用して自分を動機づけることが指摘されている。このような場合、状況に応じて使い分けられるように、両方を意識できる方向に移行していくことが予想される。

第三に、自分の達成目標と重要な他者の目標が対立する状況が考えられ

る。つまり「自分のため」に努力することが、他者が自分に期待する別の目標達成を阻害してしまう状況や、逆に他者の期待に応じて努力することが自分の目標達成を妨げてしまうような状況が存在する。受験において、親の期待する学校と自分の進学したい学校が違っているといった状況が一例である。このような場合には、いずれかの目標達成を後回しにしたり断念して、2つの動機のいずれかを優先して努力することが予想される。これに対して、一方を抑制するのではなく、2つの目標をできるだけ一致させて同時に満たすことができるように達成状況を構成し直して、2つの動機の調整や統合が図られることもあるかもしれない。

## その他の検討課題

### 「統合」をどのように測定するか

他者志向的動機への態度を測定する項目は、「他者の期待に応えることの自己目的化」と命名されているように『「他者のため」に努力することが『自分のため』にもなっている』ことを認める内容であり、「統合」の状態そのものを測定している（伊藤，2004a；伊藤，2007a）。これに対して、自己志向的動機と他者志向動機を個々に測定して双方の得点の高い回答者を2つの動機が「統合」していると考えることも可能である。ただし現在用いている尺度では、それぞれの動機を望ましいとする項目ともう一方の動機の否定的側面を指摘する項目が1つの下位尺度のなかに含まれている。このため、項目の内容から考えると、「自己志向的動機に対する肯定的態度」と「他者志向的動機に対する肯定的態度」の両方の尺度得点が高い人が、2つの動機を「統合」している人と見なすことができるかどうか疑問が残る。「統合」状態をどのように測定するのが望ましいかを検討する必要があるだろう。

### 他者志向的動機や2つの動機の「統合」は達成行動において有効か

他者志向的動機に対して肯定的態度（この調査では2つの動機の「統合」を表す項目になっている）を保持している高校生が、学習内容に基づく動機づけが高く適応的であることが明らかにされたが（伊藤，2004b）、このような他者志向的動機の達成動機づけに対する肯定的な影響についてさらに確認する必要がある。あるいは、自己志向的動機が動機づけにとって有効な状況と他者志向的動機が有効な状況を特定していくことが必要かもしれない。

### 下位尺度得点のクラスター分析の安定性

伊藤（2007a）の研究1と研究2ではクラスター分析によって構成されるグループはほぼ対応しているものの、若干異なっている。クラスター分析の結果の安定性については、今後異なるデータによって繰り返し確認していく必要があるだろう。

### 他者志向的動機に対する態度の個人差をもたらす要因

先に「葛藤」によって2つの動機の関係づけが変化することを予想したが、そもそも最初の動機への態度、特に他者志向的動機に対する態度形成に影響を及ぼす発達の要因を特定する必要がある。伊藤（2007a）は相關研究によって親の期待の内容、親に対する欲求、友人関係観と他者志向的動機との関係を探っているが、明確な結果は得られていない。おそらく、親との関係性や親の期待の高さとその内容、それまでに努力してきた達成課題の性質によって、他者志向的動機への態度、さらには「他者」が達成において果たす役割の意識が異なると予想される。

受験勉強の場合には達成行動とその結果は個人的なものであり、親の関与の程度や期待の高さとその内容によって、他者志向的動機が勉強に対する動機づけに及ぼす影響が変わるであろう。また運動部の活動の場合には、種目によって他者の関わり方が異なってくることも予想される。陸上競技



や水泳のような個人競技、剣道、柔道、テニス、バドミントンのように個人競技でありながら団体戦としてチームの成績も重要な競技、サッカーやラグビーのような集団競技では、「他者」のとらえ方や他者志向的動機が動機づけに及ぼす影響も異なるだろう。集団競技の方が動機づけに及ぼす他者志向的動機の影響が大きいと予想されるし、集団競技経験者の方が他者志向的動機を自分を動機づける要因として重視するかもしれない。

### 他者の期待はなぜプレッシャーに変わるのか

上記の課題と関連して、プレッシャーのような他者志向的動機の否定的側面を認知している人は、おそらく過去の達成課題における経験に基づいていると考えられるが、そもそも他者からの期待がプレッシャーとして知覚される条件を明らかにすることは重要であろう。一般的には、自分の能力を超えるような非常に高い遂行結果を期待されて、とても期待されるような結果を示してそれに応えることができない状況が想像される。また他者が期待する内容の認知も考慮する必要があるかもしれない。例えば、他者が結果志向的に成果をあげることを期待していると認知するならば、結果を残せないことは行為者を心理的に苦しい状況に追い込む。これに対して、他者がプロセス志向的に、達成に向けて努力する姿勢を期待していると認知するならば、結果が残せない場合でも高い動機づけを維持できると考えられる。このような他者の期待の有無、その高さ、内容が他者志向的動機の否定的側面の認知に関係しているかどうかを明らかにする必要がある。

### 他者志向的動機と「他者」表象の関係

他者志向的動機への態度の違いは、「他者」が動機づけに果たす役割の差異と考えることができる。近年の社会的認知研究のように動機も認知的に表象されていると仮定するならば、「他者」についての表象と達成動機の表象との連合が他者志向的動機の態度によって異なると予想される。親

や友人など自分の周りの重要な他者の表象をプライミングしたり、あるいは他者との関係性そのものをプライミングすることによって、達成動機づけに差異が認められるかどうか、あるいはその差異に他者志向的動機への態度が関連しているかどうかを調べることができるかもしれない。このような社会的認知の手法は、自己報告式の質問紙の妥当性の検討やクラスター分析によって引き出された回答者のグループ分けの妥当性の確認のためにも、利用することができると予想される。

### 応用の可能性

2つの動機が「葛藤」状況にあるときに両者の「統合」が達成動機づけを高く維持するのに有効であるならば、「統合」を促すような具体的な働きかけの方法を探ることも重要となるだろう。このための1つの方策として、現在行われている動機づけを高めるような実践を動機の「統合」という観点から解釈してみることが考えられる。例えば、バズ学習のような小集団学習では、学習すべき課題をいくつかのパートにわけ、グループメンバーが自分に割り当てられたパートを学習して他のメンバーに教えることによって、集団として課題を学習していく。このような学習法はメンバー間の競争を抑制し共同を促すが、「自分のため」に勉強し理解することが、自分のグループの「仲間のため」にもなるという学習状況を構成していると解釈することもできるかもしれない。往々にして「自分のため」に勉強することが競争を引き起こしたり、仲間との軋轢を生んだりするという意味で、「自分のため」と「仲間のため」が対立しやすい一般的な教室場面とは対比される。この他にも、他者との関係性のなかで動機づけを高めるような実践のなかから現在の観点で解釈することができるものを探ることによって、達成動機づけを高めるような新たな方法を見つけることができるかもしれない。

参考文献

- 芦田富雄 2003 彼らの転機 日経経済新聞社
- 伊藤忠弘 2004a 達成行動における「他者志向的動機」の役割 帝京大学心理学紀要, 8, 63-81.
- 伊藤忠弘 2004b 達成動機づけにおける他者志向的動機の役割—高校生の学習動機との関連— 日本教育心理学会第46回総会発表論文集, 171.
- 伊藤忠弘 2006 「最も努力した経験」における他者志向的動機の現れ方 帝京大学心理学紀要, 10, 27-44.
- 伊藤忠弘 2007a 自己・他者志向的動機の調整・統合過程への探索的研究—クラスター分析に基づく被験者の分類— 帝京大学心理学紀要, 11, 87-10.
- 伊藤忠弘 2007b 自己・他者志向的動機の調整・統合過程への探索的研究 (5)—クラスター分析に基づく被験者の分類の妥当性の検討 (2)— 社会心理学会第48回大会発表論文集, 664-665.
- 伊藤忠弘 2008a 自己・他者志向的動機の調整・統合過程への探索的研究 (6)—斜交回転の因子分析に基づく自由記述による項目の再分類— 日本心理学会第72回大会発表論文集, 1054.
- 伊藤忠弘 2008b 自己・他者志向的動機の調整・統合過程への探索的研究 (8)—努力の利用の実際と理想の関係— 社会心理学会第49回大会発表論文集, 512.
- Sportiva 2008年9月25日号 集英社

(心理学科 准教授)